

## 高校生の家庭科教育に対する意識調査（第2報）

—家庭科のイメージ調査—

三木 幹子\*, 高橋 亜弓\*\*

(2017年11月9日 受理)

### A High School Student Attitude Survey on Home Economics (Part. 2)

— Investigation of Image of Home Economics —

Motoko MIKI\*, Ayumi TAKAHASHI\*\*

A Sensory Test was conducted on the images of units of home economics targeting male and female high school students. Female students had more interests in home economics than male students and evaluated most units are necessary. The units male students evaluated as necessary were only dietary habit and cooking practice. The low interests of male students in home economics reflected family backgrounds and the status quo of gender equality in Japan was clarified.

**Keywords:** Factor Analysis 因子分析, Home economics 家庭科, Gender ジェンダー

#### 1. はじめに

前報<sup>1)</sup>において、高校生の家庭科に対する意識と関心について明らかにするために、高校生男女を対象に、家庭科教育に関する意識調査アンケートを行い、女子生徒と男子生徒の家庭科に対する意識の比較を行った。その結果、女子の方が男子よりも、家庭科が好き、得意であると評価しており、家庭科に対するジェンダー意識にも違いが見られた。また、結婚願望の強さと、家庭科の必要性意識との間に正の相関が認められた。

本研究では、高校生を対象に家庭科の単元（題材）に対するイメージ調査アンケートを行い、単元と授業内容による家庭科への関心度・重要度の差を明らかにすると共に、家庭科に対する女子生徒と男子生徒とのイメージの違いについても考察を行う。

#### 2. 調査方法

(1) 調査時期：2014年7月

(2) 調査対象：被験者は県内高等学校普通科1年生、女子生徒51名、男子生徒59名、合計110名である。

\* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科教授

\*\* 広島女学院大学生活科学部生活文化学科2004年度卒業生

(3) 調査内容：質問紙法によるアンケート調査を実施した。高等学校家庭科の教科書<sup>2-10)</sup>を参考にし、家庭科の単元（題材）を13種選定した（①～⑬）。使用した単元および授業内容を表1に示す。

家庭科のイメージを表す形容語対12組を設定し、13種の単元について官能評価を行った。評価にはSD法を用い、各単元のイメージについて「そう思う（5点）」「ややそう思う（4点）」「どちらでもない（3点）」「ややそう思う（2点）」「そう思う（1点）」の5段階で回答してもらった。評価に用いた12組の項目を図1に示す。

#### 3. 結果・考察

##### (1) 官能評価プロフィール

女子生徒および男子生徒の、①～⑬の各単元に対する評価の平均を算出し、図2～図14の官能評価プロフィールに示す。女子生徒と男子生徒に分けて各平均値を算出し、線の種類とマーカーを変えて表示している。

①～⑬の単元すべてについて、「ややそう思う」～「そう思う」の高い評価値（4点、5点側）が示されたことから、高校生はどの単元に対しても概ね良い印象を持っているといえる。また、女子生徒と男子生徒を比較する

表1 家庭科のイメージ評価に用いた単元一覧

単元名 (題材)	内 容
① 家族・社会との共生	人生設計とライフスタイル, 家族関係, 社会における家庭とは, 男女の家庭内役割, 家庭生活と地域・福祉
② 家庭経済	将来の職業設計, 家計簿の付け方, 収支と支出, 国民経済, 国際経済, 消費社会と消費行動, 契約トラブル
③ 高齢社会	高齢期の理解, 高齢者の特徴, 高齢社会の仕組み・社会の取り組み
④ 生活と福祉	生活のリスク, 福祉の変化, 共生社会, ボランティア活動, 社会保障, 税金と社会保険料
⑤ 食生活	食生活の変化, 健康と食生活, 栄養と食品
⑥ 調理実習	ハンバーグ, スパゲティ, 和食 (煮物, 焼き魚, みそ汁), スイーツ (ケーキ, クッキー) など
⑦ 衣生活	被服の機能・衛生・社会的機能, 被服の役割, 被服材料, 衣服の手入れ (洗濯) と保管
⑧ 被服実習	手芸 (袋やポーチ作成), 編み物, 刺繍, 洋裁 (エプロン, パジャマ, スカートなど)
⑨ ファッション	自己表現と衣服, TPO と衣服, ファッション・コーディネート実習, カラーコーディネート
⑩ 住生活	住居の機能と役割, 住居の安全と快適性, 社会環境と住居
⑪ インテリア	インテリア・コーディネート実習, 家具・小物のデザイン, 設計製図, 模型作成,
⑫ 子ども・保育	子どもの成長過程, 親の役割, 保育環境
⑬ 幼児教育体験	幼児とのふれあい体験, 子どもと遊び実習, 子育て体験

と, 女子生徒の評価の方が高く, 女子の方がポジティブに捉える傾向が見られた。

「①家族・社会との共生」(図2), および「②家庭経済」(図3)は同じような評価の傾向が見られる。女子生徒は, 家族や家計の学習に対して, 関心度と重要性を高く評価しているが, 男子生徒はそれほど身近な問題として捉えてはいない。このことから, 現代社会に於いても, 家庭内の運営に関することは女性(主婦)の役割であるという考えが根強く残っていることがわかる, それ故, 「好き-嫌い」「楽しい-楽しくない」の項目については, 女子生徒の方が評価が低く, 将来自分が関わる役割であると実感しているため, 好感度が低くなったと考える。

「③高齢社会」(図4)と「④生活と福祉」(図5)については, 女子, 男子共に評価はあまり高くなかった。特に「④生活と福祉」の「男女共通の内容」という項目について, 女子生徒は「ややそう思う」と評価しているのに対して, 男子生徒は「どちらでもない」に近い評価を示している。このことから, 生活に関する福祉や社会保障に対しては, 女子生徒は男女平等に関わるべき問題であると捉えていることがわかる。

「⑤食生活」(図6)と「⑥調理実習」(図7)を見る

と, どちらの単元も, 女子生徒と男子生徒の両者の評価が高いことがわかる。特に「⑥調理実習」に対する関心度と重要性の評価が高く, 食に関する学習は必要であると考えているといえる。また, 「内容が難しい」の項目は「どちらでもない」と評価されており, 難易度が高くないというイメージも, 食の単元への取り組みを容易にしているといえる。

「⑦衣生活」(図8), 「⑧被服実習」(図9), 「⑨ファッション」(図10)については, 明らかに女子生徒の評価が男子生徒よりも高いことがわかる。「⑦衣生活」は衣類の洗濯や保管に関する内容であるが, 生徒の家庭内でこれらは母親の役割であることが多いため, 男子生徒は自分に関わる仕事と捉えていないことが要因ではないかと推察する。

「⑩住生活」(図11)と「⑪インテリア」(図12)は, 女子生徒と男子生徒の差があまり見られず, ほぼ同じ評価を得ていることがわかる。これは, 住居に関して男子生徒の評価が高くなったのではなく, 女子生徒の評価が男子生徒と同程度まで低くなったためであると考えられる。建物としての家(建築)および内装(設計)は, 家庭内では男性の管轄であるというイメージが強いのではないだ

**家庭科のイメージ評価**

★次の①～⑩の家庭科の単元（学びの内容）についての印象・イメージを評価してください。

★イメージを表す1組の形容語対につき、1～5の数字（そう思う、ややそう思う、どちらでもない、ややそう思う、そう思う）1つに○を付けてください。

<記入例>    好き    ( 5 (4) 3 2 1 ) 嫌い

① **家族・社会との共生** :人生設計とライフスタイル、家族関係、社会における家庭とは、  
男女の家庭内役割、家庭生活と地域・福祉

	そう思う	ややそう思う	どちらでもない	ややそう思う	そう思う	
好き	( 5	4	3	2	1 )	嫌い
楽しい	( 5	4	3	2	1 )	楽しくない
役に立つ	( 5	4	3	2	1 )	役に立たない
男女共通の内容	( 5	4	3	2	1 )	男女共通でない
内容が難しい	( 5	4	3	2	1 )	内容が簡単
興味・関心がある	( 5	4	3	2	1 )	興味・関心がない
生活で実践できる	( 5	4	3	2	1 )	生活で実践できない
内容が身近	( 5	4	3	2	1 )	身近でない
実感がもてる	( 5	4	3	2	1 )	実感がもてない
現実的	( 5	4	3	2	1 )	非現実的
高校生に必要	( 5	4	3	2	1 )	高校生には必要ない
高校までの授業時間数が充分	( 5	4	3	2	1 )	高校までの授業時間数が不足

図1 家庭科のイメージ評価項目（アンケート用紙）

ろうか。

「⑫子ども・保育」（図13）と「⑬幼児教育体験」（図14）は、女子生徒、男子生徒共に評価が高いが、男女を比較すると、女子生徒の方がほとんどの項目に関して評価が高い傾向が見られた。出産と育児は、性別に関係なく、地域や社会全体の役割であるべきだが、現実としては、家庭内で主に女性が担う仕事というイメージが強いのではないだろうか。

（2）単相関係数

家庭科のイメージ評価に用いた12個の形容語対間における単相関係数を表2に示す。検定の結果、相関が有意であった組合せに\*\*（ $p < 1\%$ ）または\*（ $p < 5\%$ ）を記している<sup>注1)</sup>。

「好き－嫌い」と他の項目との相関を見ると、「楽しい－楽しくない」、「役に立つ－役に立たない」、「生活で

実践できる－できない」、「実感がもてる－もてない」等との間に有意な相関が見られた。高校生が好きと評価する家庭科の単元は、授業が楽しく、実際の生活で実践および役立てることができることが条件といえる。

「男女共通の内容－男女共通でない」と他の形容語対との相関を見ると、「役に立つ－役に立たない」、「生活で実践できる－できない」、「内容が身近－身近でない」、「実感がもてる－もてない」、「現実的－非現実的」との間に有意な相関が認められた。生徒が男女共通で学ぶべき単元という印象を持つ授業は、生徒が自身の家庭内で経験したこと、および将来、体験するだろうという実感を持つことができる授業であると思われる。したがって、家庭科に関心が低い男子生徒の家庭科への興味を高めるためには、生徒自身の人生にとって重要な単元であると実感させる必要があると考える。

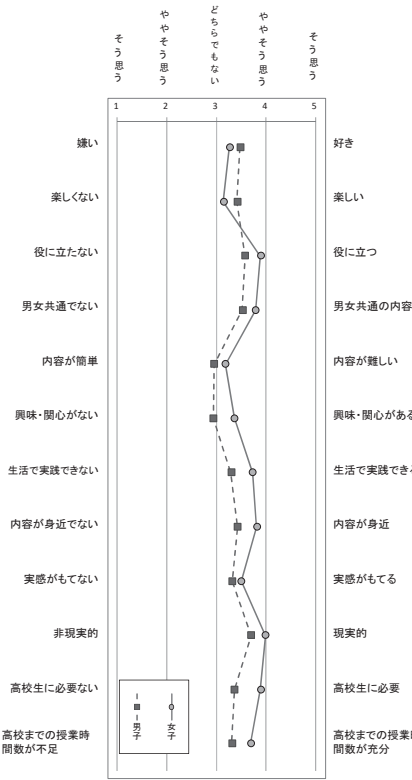


図2 官能評価プロフィール  
(① 家族・社会との共生)

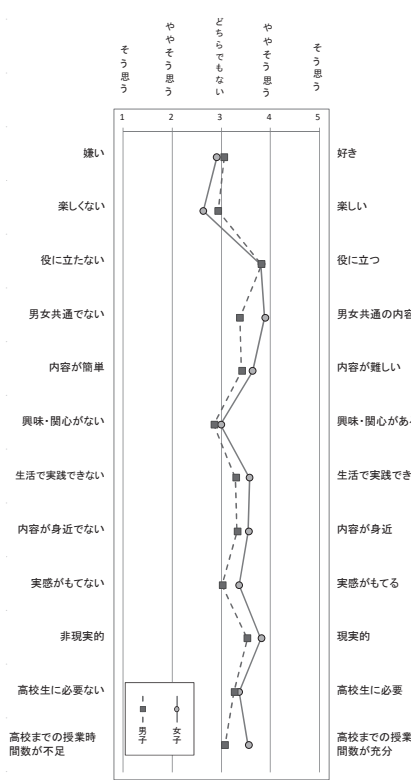


図3 官能評価プロフィール  
(② 家庭経済)

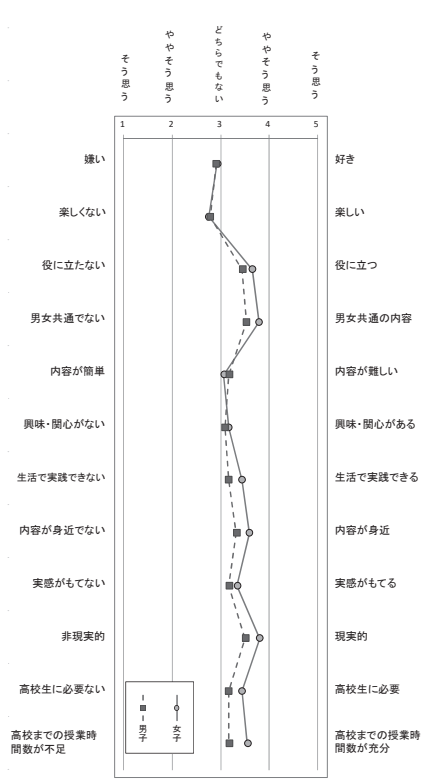


図4 官能評価プロフィール  
(③ 高齢社会)

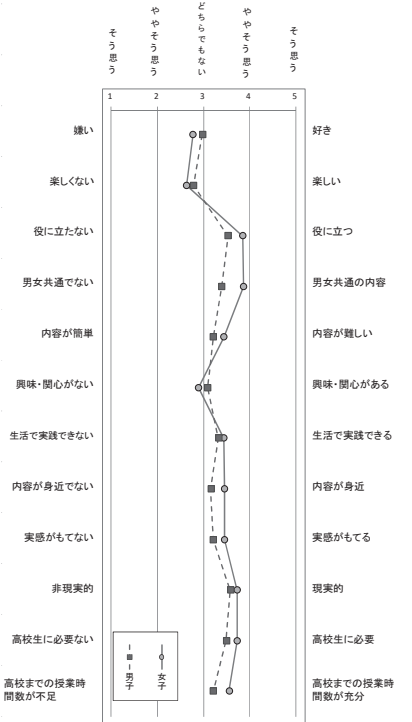


図5 官能評価プロフィール  
(④ 生活と福祉)

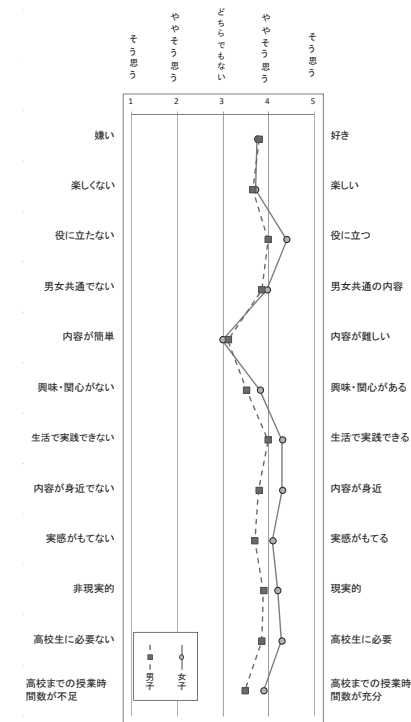


図6 官能評価プロフィール  
(⑤ 食生活)

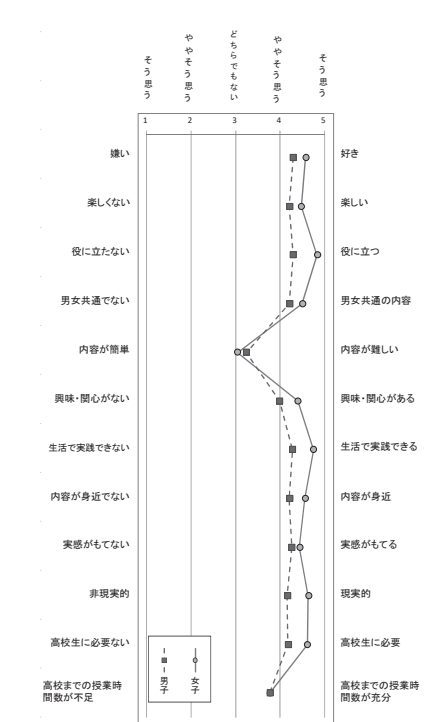


図7 官能評価プロフィール  
(⑥ 調理実習)

高校生の家庭科教育に対する意識調査（第2報）

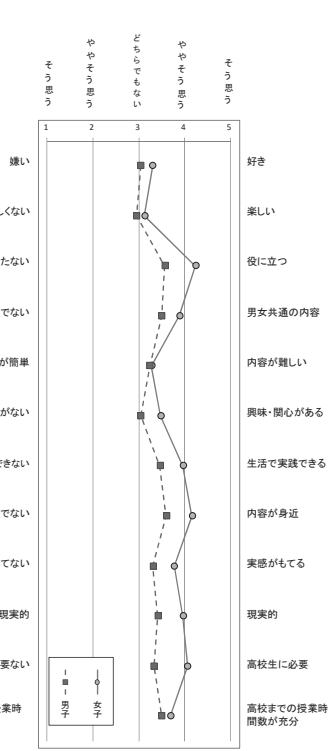


図8 官能評価プロフィール  
(7) 衣生活

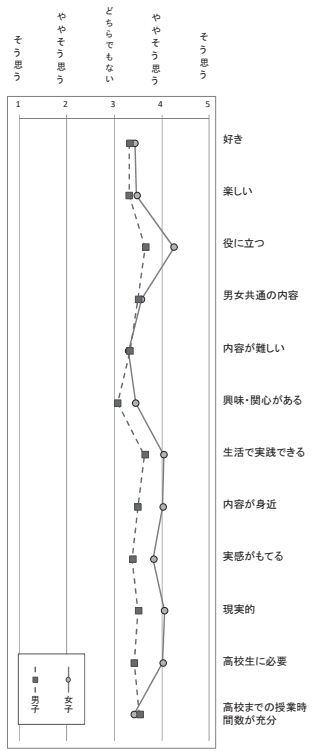


図9 官能評価プロフィール  
(8) 被服実習

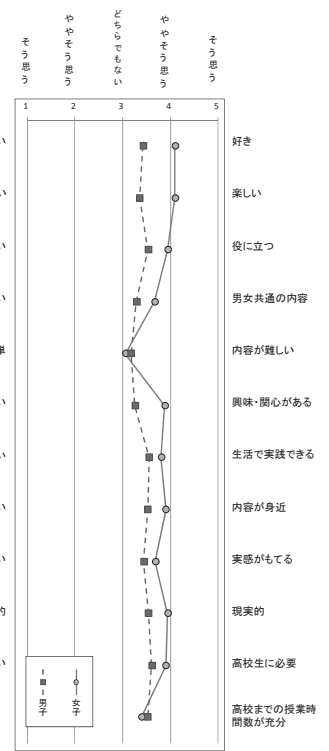


図10 官能評価プロフィール  
(9) ファッション

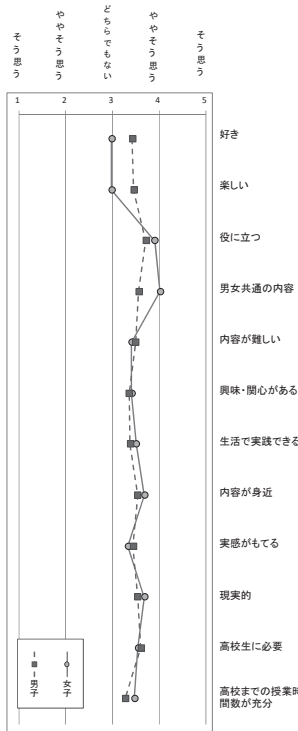


図11 官能評価プロフィール  
(10) 住生活

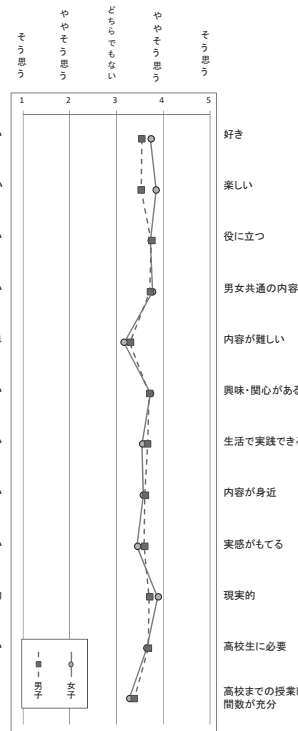


図12 官能評価プロフィール  
(11) インテリア

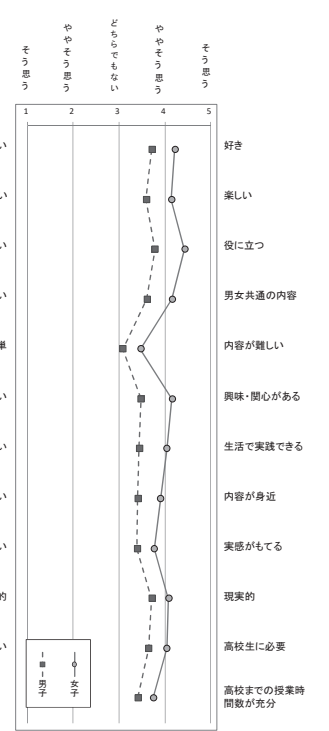


図13 官能評価プロフィール  
(12) 子ども・保育

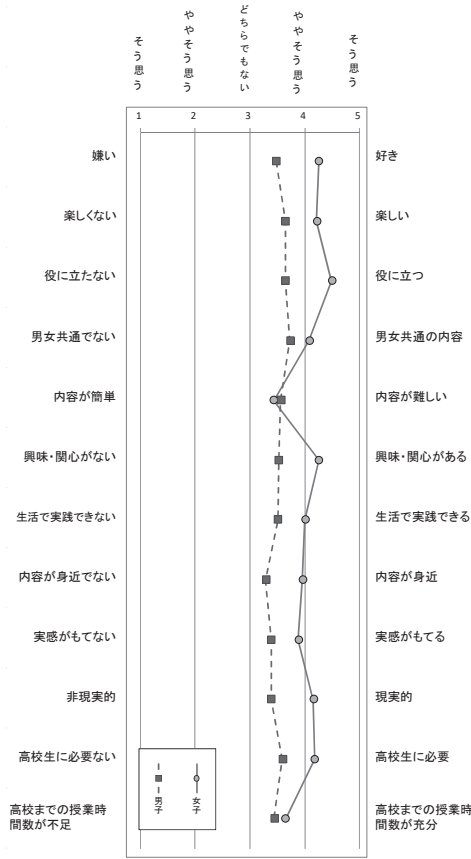


図14 官能評価プロフィール  
(13 幼児教育体験)

(3) 因子分析

家庭科のイメージについての基本因子を抽出するために、12組の形容語対を変数に、被験者110名の13種の単元に対する全評価を観測回数として因子分析を行った。因子分析には主因子法を用い、バリマックス回転法により、軸回転後の因子負荷量および各単元の因子得点を求めた。

因子分析を行った結果、表3に示すような2因子が抽出された。因子負荷量より各因子の意味を検討した結果、第1因子は、「内容が身近-身近でない」「現実的-非現実的」「生活で実践できる-できない」「実感がもてる-実感がもてない」「男女共通の内容-男女共通でない」「高校生に必要な-必要ない」「役に立つ-役に立たない」等の因子負荷量が高い値を示していることから、「必要性の因子」と解釈した。

第2因子は、「楽しい-楽しくない」「好き-嫌い」「興味・関心がある-ない」の因子負荷量が高い値を示していることから、「興味・関心の因子」と解釈した。

(4) 因子得点の分布

女子生徒および男子生徒の家庭科のイメージに関する各因子の因子得点を算出し、家庭科の各単元の因子得点

表2 単相関係数 (全被験者)

単相関	好き-嫌い	楽しい-楽しくない	役に立つ-役に立たない	男女共通の内容-男女共通でない	内容が難しい-内容が簡単	興味・関心がある-興味・関心がない	生活で実践できる-生活で実践できない	内容が身近-内容が身近でない	実感がもてる-実感がもてない	現実的-非現実的	高校生に必要な-高校生に必要な	高校までの授業時間が充分-高校までの授業時間が不足
好き-嫌い	1.0000-											
楽しい-楽しくない	0.8111**	1.0000-										
役に立つ-役に立たない	0.5135**	0.5293**	1.0000-									
男女共通の内容-男女共通でない	0.3492**	0.3498**	0.5587**	1.0000-								
内容が難しい-内容が簡単	-0.0161	-0.0278	0.0501	0.1142**	1.0000-							
興味・関心がある-興味・関心がない	0.6204**	0.6425**	0.5317**	0.4032**	0.0061	1.0000-						
生活で実践できる-生活で実践できない	0.4020**	0.4196**	0.5361**	0.4449**	0.0264	0.4854**	1.0000-					
内容が身近-内容が身近でない	0.3913**	0.4075**	0.5185**	0.4385**	0.0346	0.4887**	0.6397**	1.0000-				
実感がもてる-実感がもてない	0.4416**	0.4602**	0.4894**	0.4620**	0.0453	0.5237**	0.5736**	0.6423**	1.0000-			
現実的-非現実的	0.3433**	0.3357**	0.5398**	0.4570**	0.0917**	0.4404**	0.5544**	0.5589**	0.6001**	1.0000-		
高校生に必要な-必要ない	0.4203**	0.4281**	0.5187**	0.3907**	0.0395	0.4960**	0.4879**	0.4811**	0.4967**	0.4933**	1.0000-	
高校までの授業時間が充分-高校までの授業時間が不足	0.1975**	0.1868**	0.2933**	0.3156**	0.1474**	0.1960**	0.2827**	0.3302**	0.2723**	0.2710**	0.4058**	1.0000-

無相関の検定 \* : 5% \*\* : 1%



表3 因子分析（家庭科のイメージ評価）

因子負荷量：回転後（バリマックス法）

変数名	第1因子	第2因子
	必要性の因子	興味・関心の因子
内容が身近－身近でない	0.7017	0.3265
現実的－非現実的	0.6996	0.2622
生活で実践できる－できない	0.6706	0.3506
実感がもてる－実感がもてない	0.6631	0.3887
男女共通の内容－男女共通でない	0.5873	0.2869
高校生に必要－必要ない	0.5692	0.3801
役に立つ－役に立たない	0.5659	0.4835
高校までの授業時間数が充分－時間数が不足	0.4682	0.0944
楽しい－楽しくない	0.1787	0.8825
好き－嫌い	0.1669	0.8765
興味・関心がある－ない	0.3827	0.6714
内容が難しい－簡単	0.1584	-0.0800
固有値	3.3110	2.9232
寄与率（%）	27.59	24.36
累積寄与率（%）	27.59	51.95

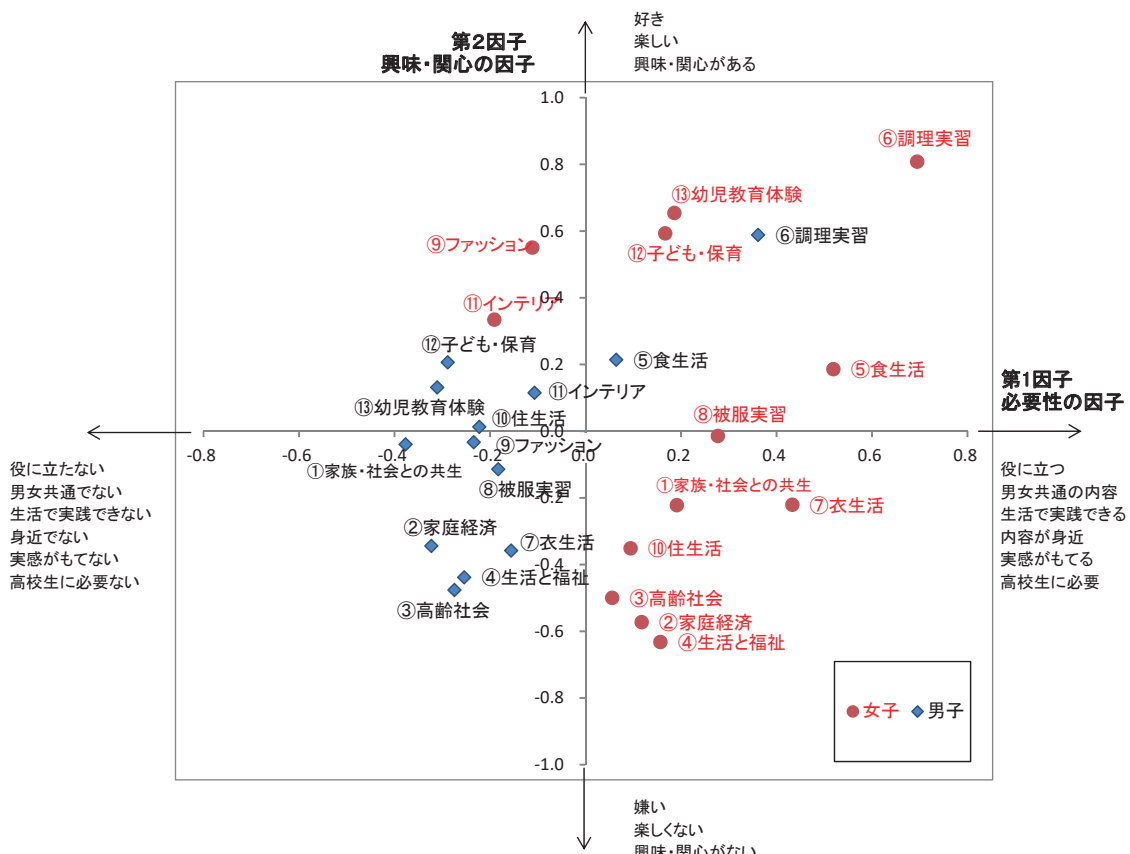


図15 因子得点の分布（第1因子と第2因子）

の位置関係を検討した。第1因子と第2因子の因子得点の分布図を図15に示す。よこ軸に第1因子“必要性の因子”，たて軸に第2因子“興味・関心の因子”を取り，女

子生徒と男子生徒の因子得点の平均値を，マーカーを変えて表示している。

第1因子「必要性の因子」について，女子生徒はほと

んどの単元がプラス側に分布しており、家庭科の授業を、役に立つ、生活で実践できる、身近で実感できると評価していることが分かる。第1因子がマイナスを示した単元は、⑨ファッション、⑩インテリアの2つであり、これらは生活や生命の維持に必須の条件ではないため、家庭科で学ぶ必要性を感じにくいのではないだろうか。

男子生徒の第1因子については、ほとんどの単元がマイナスに分布しており、女子生徒とは対照的な結果となった。子育てや高齢者問題、福祉などについての学習は、生活に於いても社会に於いても重要な問題だと思われるが、男子生徒にとってはこれらの学習は、役に立たない、実感がもてない、自分とは関係のないものとイメージしているということになる。あるいは、単に複雑で難しい問題から目をそらして逃避しているだけなのかもしれないが、日本の現代社会における、男女共同参画の壁の存在が高校の家庭科の現状から感じられる。男子生徒の第1因子がプラスであった単元は、⑤食生活、⑥調理実習の2つのみであった。食べるという行為に関してのみ、男子生徒は重要性和実感を感じるようだ。

第2因子については、女子生徒と男子生徒共に、プラスとマイナスの両方に、ほぼ同じ単元が分布していることがわかる。特に第2因子の値が高い単元は、⑥調理実習、⑬幼児教育体験、⑫子ども・保育、⑤食生活、⑩インテリアなどであった。特に⑥調理実習は女子・男子共に値が高く、「好き」「楽しい」「興味関心がある」と評価されている。また、女子生徒は⑫子ども・保育、⑬幼児教育体験の評価が男子よりも高く、小さい子どもに対する関心の高さが伺える。⑨ファッションは、女子生徒のみ第2因子がプラスであった。

第2因子がマイナスに分布している単元は、②家庭経済、③高齢社会、④生活と福祉などであり、家計や税金、保険といった数学を必要とする支出計算に関すること、老化や介護に関する問題は、「楽しくない」「興味・関心がない」と評価されている。高校生にとっては遠い未来の話であろうし、子ども達が祖父母と同居していない家庭が多い現代では、実感しにくい単元であると思われる。

各単元について女子と男子を比較すると、①家族・社会との共生、②家庭経済は、女子生徒は第1因子がプラスであり、男子生徒はマイナスに位置するといった、大きな差が見られた。第2因子に関してはどちらもマイナスであるが、女子生徒の方がややマイナス値が大きかった。人生設計や家庭生活、消費行動に関する内容は、女子、男子両者に共通する学習である。それにもかかわらず、男子がこれらに必要性を感じていないという結果は、男性が家庭経営（家計や家事）にあまり関わってこ

なかつた日本社会の問題なのかもしれない。あるいは、日本の男子高校生の未成熟さの表れとも考えられるだろう。③高齢社会と④生活と福祉の結果も同様の傾向がみられることから、男子生徒に対しては、自分が社会の構成員であることや、地域や社会のコミュニティーにおいて他者と協働し、共生していることをより実感させ、意識を高める必要があるだろう。

⑤食生活と⑥調理実習は、男女共に第1因子と第2因子がプラスの領域に分布しており、生活において重要であり、かつ興味・関心が高い単元であるといえる。外食・中食産業が生活に浸透している現代においても、調理や栄養の知識と技術の必要性を実感しているようだ。

⑦衣生活および⑧被服実習は、女子生徒が第1因子プラスなのに対して、男子生徒はマイナスに分布している。⑦衣生活は、日常で身につける衣類の洗濯方法や保管方法について学ぶ単元であるため、清潔で快適な衣生活を送るためには必要な学習である。しかし、日本の家庭では「掃除・洗濯」は女性の仕事という観念が強く<sup>注2)</sup>、家庭における価値観が、男子生徒の衣生活に対する興味関心の低さに影響を与えているのではないだろうか。

⑨ファッションと⑩インテリアは、男女共に第1因子はマイナスであり、実生活で役に立たないという印象を持たれている。ただ、第2因子はプラスであり（男子の⑨ファッションはマイナス）、特に女子生徒の評価が高く、身の回りのデザインに対する関心は高いようだ。

⑩住生活は、女子生徒が第1因子プラス、第2因子マイナスの領域に、男子生徒が第1因子マイナス、第2因子プラスの領域に分布しており、対照的な結果となった。⑩住生活は他の単元に比べて、男子の第2因子の値が女子よりも高いことがわかる。住居・建築分野の建物に対する興味関心は男子の方が高いといえる。

⑫子ども・保育と⑬幼児教育体験については、第1因子は女子生徒がプラス、男子生徒がマイナスに位置しており、また第2因子についても、女子生徒の方が評価値が高く、男女の差が顕著に見られた。このように、高校1年生の時点で、育児に関する重要度と興味関心に男女差が存在していることは明らかである。

子どもを育てるという行為は、家族だけでなく、地域と社会が協力して行うものであるが、今回の男子高校生の意識の低さは、家庭環境が影響していると考えられる。平成24年の内閣府の調査結果<sup>12)</sup>より、「(22) 配偶者が子どもの世話をする頻度」の問いに対して、「頻繁にする（ある）」と回答した既婚女性は46.2%であった。また12.1%が「ほとんどしない」と答えている。既婚男性については、「(9) 育児休業取得の希望」の問いに対して、約4



割が「育児休業は取得しなくてもよい」と回答している。

以上のことから、高校生の家庭、生活、育児に対する意識を高めるためには、まず家庭内での男女共同参画を推進する必要があるだろう。

#### 4. まとめ

高校1年生の女子生徒、男子生徒を対象に、家庭科のイメージに対する官能評価を行い、性別による家庭科の各単元へのイメージの違いを考察した。

(1) 官能評価プロフィールの結果より、高校生はどの単元に対しても概ね良い印象を持っているが、女子生徒の評価の方が男子生徒よりも高く、女子の方が家庭科をポジティブに捉える傾向が見られた。

(2) 家庭の運営や福祉、子育てに関する単元については、主婦の役割というイメージが強く、女子生徒の方が身近なことであると実感していることがわかった。

(3) 食生活、調理実習は、女子生徒と男子生徒共に関心が高く、食に関する学習が重要であると考えている。

(4) 衣生活、被服実習、ファッションは、女子生徒の評価が高いが、住生活とインテリアは、男女ほぼ同じ評価であった。

(5) 単相関係数の結果より、高校生が好きと評価する単元は、授業が楽しく、実際の生活で実践できて役立つ内容であることがわかった。

(6) 家庭科のイメージについての因子分析を行った結果、“必要性の因子”、“興味・関心の因子”の2因子が抽出された。

(7) 因子得点の分布図より、女子生徒は、ほとんどの単元に対して、役に立つ、生活で実践できる、身近で実感できると評価しているが、男子生徒は、食に関する単元以外のほとんどの単元に対して必要性の評価が低かった。

(8) 女子生徒と男子生徒共に、興味・関心が高かった単元は、調理実習、子ども・保育、インテリアなどであった。反対に、興味・関心が低かった単元は、家庭経済、高齢社会、生活と福祉などであった。これは、祖父母と同居していない家庭が多いことが要因と考える。

(9) 今回の調査結果から、日本の現代社会における、男女共同参画の限界が感じられた。家庭科に対する興味や重要性の意識が低い生徒に対しては、社会の構成員として自覚をさせ、地域や社会で他者と協働し、共生していることをより実感させる必要があるだろう。

最後に、アンケートにご協力いただいた広島翔洋高等学校の生徒のみなさま、高校関係者のみなさまに感謝を申し上げます。

#### 注

- 1) 今回の単相関係数においては、<sup>\*</sup>( $P < 5\%$ )の組合せは見られなかった。
- 2) 内閣府が平成23年・24年に実施した「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査<sup>12)</sup>の結果によると、「⑩ 家族の洗濯物を干すことは、自分がするような仕事ではない」の問いに対して、既婚男性が「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答した割合は、55.0%であった。さらに、「(7) 洗濯の有無」の問いに対しては、既婚男性の約3割が「ほとんどしない」と回答している。一方、既婚女性への質問「(19) 配偶者による家族の洗たくものを干す頻度」に対して、50.5%が「ほとんどしない」と回答している。

#### 引用文献

- 1) 三木幹子、岡本亜弓、「高校生の家庭科教育に対する意識調査—女子生徒と男子生徒の比較—」、広島女学院大学人間生活学部紀要、第3号、2016年3月、pp. 1-10
- 2) 『家庭基礎 自立・共生・創造（家基301）』、東京書籍、2014
- 3) 『家庭基礎 ともに生きる 明日をつくる（家基302）』、教育図書、2015
- 4) 『家庭基礎 パートナーシップでつくる未来（家基304）高等学校家庭科用』、実教出版、2012
- 5) 『家庭基礎21（家基305）』、実教出版、2013
- 6) 『図説 家庭基礎（家基306）』、実教出版、2014
- 7) 『家庭基礎 明日の生活を築く（家基307）』、開隆堂、2015
- 8) 『高等学校 家庭基礎 ともに生きる・未来をつくる』、第一学習社、2013
- 9) 『家庭総合 自立・共生・創造（家総301）』、東京書籍、2014
- 10) 『家庭総合 パートナーシップでつくる未来（家総303）』、実教出版、2013
- 11) 文部科学省編、『高等学校学習指導要領解説家庭編』、開隆堂出版、2010
- 12) 内閣府男女共同参画局、「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告書、[http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei\\_ishiki/index.html](http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei_ishiki/index.html)（2017年11月6日閲覧）

#### 参考文献

- 1) 三木幹子、植木由香、「女子大学生と女子高校生の恋愛観・結婚観とジェンダー意識との関係」、広島女学院大学論集、第60集、2010年12月、pp. 95-109
- 2) 内閣府男女共同参画局、「男性にとっての仕事と家事・育児参画」、[http://www.gender.go.jp/policy/men\\_danjo/kiso\\_chishiki2.html](http://www.gender.go.jp/policy/men_danjo/kiso_chishiki2.html)（2017年11月6日閲覧）